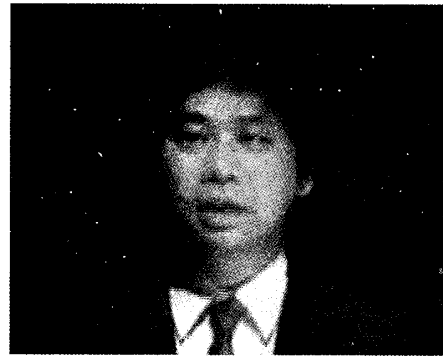


8. 指定討論

野 島 久 雄

NTT基礎研究所

NTT基礎研究所の野島と申します。宜しく申し上げます。細かい質問に関しましては、今、渡辺先生からいろいろと指摘していただいたんで、今回は、もう少し大ざっぱな話、全体的なお話をさせていただきたいと思えます。そのためには、私のバックグラウンドを話す必要があります。私は、この研究所がここ幕張の地に居を定めることになった1983年に、電電公社の電気通信研究所というところに入りました。



野 島 久 雄

NTT基礎研究所

この時は、周りに「理科系」の人しかいませんでした。そうした何千人の中の一人二人の心理学研究者としてある種の役割が期待されて入社したわけです。というのは、今まで、とにかく技術、技術で走ってきたから、もう少し人間の観点を入れようというんで、アンチテーゼを出すことを要求されたわけです。実際僕もいろいろとアンチテーゼを出すのが好きですから、いろいろな形で議論をしました。例えばいろんな新しいハイテクな機器が出てくる、それに対していろいろと使いにくいことがある。たとえば、ワープロ、ビデオの予約、あるいはEメール、携帯電話に関してもそれぞれいろいろな問題点を指摘するわけですね。しかし、現実はどうなっているかというと、いろいろな問題はあっても、そうした道具は使われるようになっていく。それは、もちろん、改善がされていくからではあるのですが。

たとえば、携帯電話などは典型的なのですが、最初の頃は非常に評判が悪いし、あんな、どこに行っても電話がかかってくるなんて誰かの奴隷になるみたいで嫌だ、電話の奴隷になるのは嫌だといっているような人までが続々と買い始めるようになる。これは、その機器に対する態度が変わるということもあるんでしょうけれども、むしろ、そういうものが道具が入っていくことによって、我々の人間関係、社会関係ってものが変わってくる。まさに、今日、パネリストの皆さんが発表されたそういう技術というのは、そのような社会を変える力、人間関係を変える力というのを持っているんだと。それでは、どのようにして、さらによりよいものとしていくかということを我々考えていかなきゃならないんじゃないかと。今日のお話は技術のお話が多かったわけですけど、我々もNTTという会社の中で、例えば、ギガビットというくらい電送容量の大きな回線を技術的には日本全国に張り巡らせることが可能になった。しかし、それをどういうふうにしたら使えるだろうか。とにかく、世の中に売りたい。そのためにはどうしたらいいだろうか。このように、技術的に実現できる技術や商品があったときに、そのまま、ぱんと、社会的に受容させたいという話がある。また、人間の方から見たときに、とにかく私はこういうことがしたい、できれば、いろいろなハイテクな道具を使ってやりたいことがあるのだけれど、それをどういうふうにとったらいいのかわからない。どうにかして技術者は

実現できる手助けをしてくれないだろうか。その間で、我々心理学、あるいは認知科学をやる人間としては、何ができるだろうかということがあります。

今までは、僕は主に心理的な評価の研究をやってきました。ところが、こういう技術は、好きだ、嫌いだとかっていう心理的な評価だけではどうもうまくいかない。今回、仁科先生が発表されたような生理的な評価を間に入れることによって、この間のステップがもう少し明確になるのではないかと思います、非常に参考になりました。但し、問題はやはり、技術、実際にそのものが提供してくれるものと、生理的な関係という、この関係、これはかなりダイレクトな関係があることもありますけれども、その生理的な評価が必ずしも心理的な評価に対応しないこともあるのではないだろうか。例えば、先程からお話に出てきました高解像度のテレビ会議システムというのは非常にすばらしいものですが、必ずしもユーザが好むかどうかはよくわからない。筑波の生命研の森川先生という方が研究されていましたが、むしろ低解像度の方が好まれるような条件というのも、確かにある。我々の会社の話でいいますと、やはりテレビ電話というのはいつまで経っても不評なんですね。画像が送れるからよさそうなのですが、ダメだ。例えば、皆さんもやったことあるかと思いますが、プリクラというのがあれだけ流行ったのは、プリクラの解像度というのが非常に、わざと低めに抑えてあって、誰でも可愛く写るようになってきているという話もあるわけです。そういうような側面があって、むしろ高解像じゃないものが望まれるような条件がある。そうしますと、要するに、心理的な評価ってものが必ずしも、技術がハイテク、あるいは高機能、もっともっとという形になるのに対して、必ずしもそれが望まれないようなことがある。

それでは、どのようなものが望まれるのかということを考えた時に、私としては、その道具の社会的な意味、役割というものを考えていきたいというふうに考えているわけです。様々な道具が受容されることによっていろいろなものが変わっていく。例えば、我々が何かやろうとしたとき、こういうところで発表するってこともそうなんですけども、人の目に触れる、あるいはそもそもこういうところで話をするのは、誰かから頼まれるという、そうした関係から出ているわけですし、何かをやるということは、かりにそれが趣味であったとしても、全くひとりに閉じた趣味ってのはあり得なくて、社会的に認められたゴールであるとか、人に分け与えるとか、人に見せて自慢するとか、年賀状でも子供の写真を貼ってやるとか、そういうような形での社会的な枠組みというのが我々の、道具を使うことには関わってくる。技術を考えると時には、そういうようなものを是非考慮に入れて考えていただきたいと思っているわけです。そういうことを考えたときに、今のインターネット、あるいは今のハイテク社会というのは、正にそういう社会的な場面、社会的な関係というものを非常に強化しやすくなっているということがある。これは私の好きな実験なんですけれども、昔、1960年代にアメリカの社会心理学者のスタンレー・ミルグラムという人が人と人のつながりを研究したことがあるんですね。日本でもリプリケートした研究があります。大阪の交差点を歩いていたらある女子中学生を最終目的として、この子のことを全く知らない北海道稚内の海辺にいたお婆ちゃんから、あなたの知っている人の中で、その中学生を知ってそんな人を教えて下さいっていう形で、知っている人、直接の知り合いのリンクだけでつなげていくと、だいたい10人ぐらいで目的の中学生までつながるという研究があるのです。アメリカでも、東海岸から西海岸まで、やっぱり6人、7人ぐ

らいで届くということが分かって、みんなビックリしたわけですね。ところが、今、この話をインターネットの世界の中で話しをすると、あまり驚かれないんです。そういう意味でいうと、非常に人のつながりをやり易くしている。ある意味では、やり易くしている。ある意味ではまた、やり難くもしているわけですが、そういうようなことを、今のインターネット、あるいはハイテクの時代というのがやってくれている。そういう意味でいうと、例えば、携帯電話、あるいはインターネットというのは今回の話しでいえば、我々が必要としているような機能、あるいは品質というのを社会的に位置づけるときに、正に何らかのゴール、何らかの道具をいつでも利用可能にするもの。インターネットが手近にあれば、いつでも辞書のひけたり、いつでも誰かのことを調べたり、いつでもチャットしたり、トークしたり、あるいは電子メールを書いたりすることができる。それからあと、先程、必ずしも高解像と高帯域の方が望ましいとは限らないといいましたけれども、しかし、やはり何らかのものを送ろうとしたときには、目的のものに応じただけの帯域が欲しいことが確かにあるわけですね。広帯域、高解像が保証されているってことは何でも送るためには必要なことである。正に、だから、これらの技術、いつでもできるようにするためのネットワークの技術、あるいは高解像度、なんでも送れるようにするための高解像の技術というのが、技術ありきで進むのではなくて、社会的な文脈の中で位置づけることを考えていただきたい。そういう意味でいうと、正にこのメディア開発センターのようなセンターというのは、SCSもそうですけれども、社会的な情報のリンクとしての働きを十分に果たしていただきたいと、そして実際に果たしてきたということに感謝したいと思います。非常に大ざっぱな、全般的なコメントになりましたけれども、このような枠組みの中でさらにメディアの技術の開発をやっていき、それに協力していきたいと考えております。

野島：野島です。安田先生がいわれた色の話、あるいはR、Lの区別をやらなきゃいけないという話は、認知科学の分野で研究が行われています。その知見をお知らせしますと、まず一つには、色の話というのは非常に文化差があるということです。日本でも、例えば赤とか、青とかというのは、歴史的に派生した順序がありますが、それとはまた別にどの色をどのようなラベルをつけてに呼ぶかというのは非常に文化差があって、それが我々の方の仕方を規定しているということによく知られています。例えば、万国共通の色体系ってのは科学的にみられたのがありますが、現実の文化との対応関係というのは今のところまだよく分かっていない。何故そういうふうになっているのかってのもよく分かっていない。しかし、それが我々の思考形態に非常に影響しているので、それが、例えば、伝統的にあったものが崩れてしまうというのは、私たちに何らかの認知的な役割あるいは効果を及ぼしてくるだろうということまで分かっています。

また、LとRの区別の話に関しても、研究がありますが、基本的には、子供がバイリンガルになれるかどうかというのは、だいたい9才ぐらいに臨界期があって、9才までに、例えばアメリカならアメリカに行って、生の英語に触れる環境、それから生の日本語、親から日本語、友だちから英語っていう環境に9才ぐらいまで触れているとバイリンガルになり得ると。だから、そういう意味でいうと、9才までが臨界期で、その年齢になるまでに外国に行って2、3年生活してくるとLとRが区別できるようになるだろうというのが一つの知見です。ただ、最近はやっと、そんなに単純ではないということも分かってきました。要するに、バイリン

ガルの子供ってというのは、LとRを使い分ける能力を手に入れる代償に、例えば、第一言語の方の能力がだいぶ落ちてしまうということも知られているので、その辺で、例えば、本当の情報として何を提示して、何を与えるかというのは、なんでも全て与えればそれを受け入れてくれるというわけでもないので、その辺の見極めは、教育的に非常に重要なことだとは思いますが。ただ、本当にそういう非常に重要な情報を与えなければ、それが獲得されないということも確かなので、安田先生がいわれたような、正しい情報を適切に与える。何を与えるかに関しては、教育学の教育的な配慮が必要だろうということだと思っています。